開催地名：群馬県みどり市	
開催日時	令和 3 年 12 月 12 日（日）　10:00～11:30
開催場所	みどり市大間々町第 12 区公民館
語り部	菅野澄枝　　（宮城県仙台市）
参加者	地域住民 約 50 名
開催経緯	大間々町第 12 区自主防災会は、平成 31 年 4 月 1 日に発足のため、今後、訓練の実施、人材の養成、防災機材の整備等々、活動を積み重ねる中で、組織力を高めていくこと。
内容	（1）　東日本大震災の被害状況 東日本大震災のときに宮城県仙台市では大きな被害があり、沿岸部のほうはほとんど回折状態だった。今も行方不明の方が 2 万人近くいる。本震よりも余震の揺れのほうが強く、栗原町では震度 6 強を記録し、一晩中ずっと揺れ続き、地震酔いする方も出現したことなどもあり、被災者の不安が長く続いた。長時間の地震でお店も閉店状態で、夜間になると不安も増す。またマンションの高層では停電でエレベーターも停止されているため、住んでいる方の避難が殺到した。大川小学校で教員 10 名をはじめ、生徒など山に逃げた方以外にはたくさんの方が亡くなった。群馬県みどり市の震災に関する心配では、山が近いことから水害時の土砂災害が心配される。東日本大震災時の岩切地区は、屋根、瓦が全部バラバラ落ちていた。 （2）　命を守るための行動 発生時間が 14 時 46 分だったため、子どもたちが学校を帰宅する時間であった。信号機も止まった状態の中で、車を運転している方々も自宅に早く帰宅したいため急いでいる中、横断歩道で停止してくれない状況になった。そんな中、地域の方々が車止めをしてくれたため、子どもたちも元々信号があった横断歩道を渡ることができた。 このことから、日頃からの地域の方たちの交流も大切で、平時から地域の中で協力しあうことが大事とわかった。その他、石積みのブロック塀も震災で壊れてしまうので、ブロック塀も危険になる。このため近づかないことが大切だ。また震災の時は川や海の水害もあるため、普段からの管理も重要である。 （3）　東日本大震災から得た教訓

	震災後すぐに片付けをしても再度大きな地震がくることもあるので、片付けをすることよりも、その状況を受け止めてしばらくそのまま生活をした方が良い。配給も限りがあるため、数が足りなくなりもめたりすることもあった。普段から防災に対する知識を勉強しておくこと、震災経験を活かした防災マニュアル作成し普及することも重要となることがわかった。 帰宅困難者は、自身の地域ではない避難所で様々な年齢・被害状態の方が入り混じって身を寄せ合っていた。特に若い女性が困っていたが、これをサポートすることも十分にできていなかった。震災のときにいろいろな判断をするためにも、女性の知恵でサポートをしていくことも大切であった。活動助成金で補助されている SBL という団体が全国で 700 名ほどいるが、その方たちのサポートも重要になる。
開催地より	地域の住民同士のつながりが重要であること、また女性に対するサポートが必要なことを強く実感した。また全国に加盟者がいる SBL についても、今後活用を考えていきたいと思う。